

JICA's Approach

生徒中心の授業に変えるために

1966年に青年海外協力隊理数科教師隊員の派遣によってスタートし、今や基礎教育分野の中心的な事業の一つになっているJICAの理数科教育協力。それはどのような方針・アプローチで行われているのだろうか。

基礎教育の量と質の向上を

1990年にタイのジョムティエンで「万人のための教育世界会議」が開かれ、「万人のための教育（Education for All）」が合意されるなど、90年代は基礎教育の普及への関心が高まった。しかし、開発途上国では初等教育の無償化などにより就学率は向上したものの、質の面で課題が残り、十分な成果をあげることができなかった。それを踏まえ2000年にセネガルで開催された「世界教育フォーラム」では、量の拡充だけでなく質の高い基礎教育の重要

「チョーク&トーク」から生徒中心の授業へ

JICAはそうした日本の経験を生かせる理数科教育を重点に、基礎教育の質の改善に取り組んでいる。途上国では、教員の教科知識の不足に加えて、教員が一方的に話しながら黒板に書く「チョーク&トーク」といわれる授業方法が多く、こうした授業が生徒の理解を難しくする原因とされる。そこでJICAは、教室レベルでの授業の改善を目指した教員研修を中心に、指導書の作成、研修の制度化、カリキュラム・教科書の改善、学校運営管理の改善、教育行政機関の能力向上、地域社会の参画促進など多様な支援を組み合わせて、教育の質の向上に努めている。

その中で共通しているアプローチは、教員からの一方的な授業方法を廃して、実験・実習・演習などを取り入れ、子どもの興味・関心をかき立て深い理解を促す生徒中心の授業の導入、授業の質の向上には十分に練られた授業計画と準備が大切であることから、単元の位置付けを明確にし、指導案作成や教材準備の習慣・技術を教員に身に付けてもらうこと、日本の教育現場で広く実践されている授業研究の手法を取り入れ、実際の教室での授業をもとに同じ学校や地域の教員が改善方法を議論し、教授技術を向上させる試みの導入である。

こうした理数科教育協力のプロジェクトは現在、世界27カ国で実施され、さらにケニアやホンジュラスの協力の成果は南南協力という形で域内の途上国に国境を越えて広がっている。また、理数科教師隊員の派遣は累計57カ国、2146人に上り、帰国した隊員が途上国での経験を日本の子どもたちに伝えるなど、日本の教育の国際化にも役立っている。

性が確認された。こうした潮流の中で、JICAも基礎教育の普及のために、就学率の向上、教育の質の向上、男女格差の是正、ノンフォーマル教育、教育のマネジメントの改善の5分野に力を入れて協力を行っている。特に、量と質は、車の両輪であるとして、バランスの取れた協力を重視している。読み書き計算など生活に必要な基礎的な知識や技術を学ぶ基礎教育は、社会への扉を開くカギとなる。

地域別の協力実施方針と実施状況

アフリカ
就学率の向上と教育の質の改善が同時に必要であり、教員研修により授業の質を改善する広範なニーズが存在するので、積極的に理数科教育協力を推進する。ケニア「中等理数科教育強化計画」で培われた経験を活用した広域協力により、各国のニーズに対応しつつ効率的な協力を展開する。

中南米
就学率は比較的高いものの中退・留年が多く、教育の質が不十分であることが一因であると思われる。特に中米諸国と南米の中でも特に開発の遅れた国々を重点的に支援する。ホンジュラス「算数指導力向上計画」を拠点とした広域協力により、効率的で効果的な協力を実施する。

アジア・中東
基礎教育開発の度合いは多様であり、各国のニーズに応じた協力を検討する。インドナ地域や南西アジア地域の教育開発の遅れた国にプライオリティを置きつつも、これまでの協力の蓄積のある国については、継続的な支援を検討する。

特に理数科教育は、進展するグローバル化の中で、途上国が科学技術の進歩や経済・社会の発展を遂げるために不可欠である。また、人間の探究心や論理的思考、創意工夫・発明の力を涵養し、創造的で豊かな人間性をはぐくむ役割も担っている。江戸時代から「読み書きそろばん」など庶民の教育が盛んであった日本では、明治以降に教育の近代化とともに、科学技術振興に向けて理数科教育を拡充し、今日の経済発展を支える人材が育成された。

JICAの理数科教育協力

